

# 南房総市忽戸魚見根洞窟遺跡

—詳細分布調査に伴う報告書—



令和5年11月

南房総市教育委員会

みなみ ぼう そう し こつ と うお み ね どう くつ い せき  
南房総市忽戸魚見根洞窟遺跡

—詳細分布調査に伴う報告書—



## 序 文

本書は、新たに発見された忽戸魚見根洞窟遺跡の詳細分布調査の成果をまとめた埋蔵文化財報告書です。

南房総市は、房総半島南部に位置する面積 229.55 km<sup>2</sup>、人口約 3.5 万人の市です。市域の北側には県下最高峰の愛宕山（標高 408 m）をはじめ、御殿山（標高 364 m）、富山（標高 349 m）そして伊予ヶ岳（標高 336 m）などの緑濃い山々が連なり、他の三方は東京湾と太平洋に面しています。この豊かな自然資源に恵まれた本市には、先人達の生活の痕跡などが埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。

令和 4 年度に地権者によって当遺跡が発見され、発見時には弥生時代から近世までの資料が採集されています。洞窟遺跡は、千葉県内においても遺跡数が少ない稀少な存在です。南房総市教育委員会では、当遺跡の性格をより明らかにするため詳細分布調査を実施しました。調査でも考古遺物などの新たな資料が出土し、房総半島東南端において洞窟遺跡の貴重な資料を得ることができました。

刊行にあたり、本書が学術資料としてだけではなく、郷土の歴史に対する興味関心を深めるための資料として多くの人々に広く活用されること期待しております。

最後に、詳細分布調査から報告書刊行に至るまで、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大なご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

令和 5 年 11 月

南房総市教育委員会  
教育長 三幣 貞夫

## 凡 例

- 1 本書は、南房総市教育委員会による忽戸魚見根洞窟遺跡に係る埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。

忽戸魚見根洞窟遺跡 南房総市千倉町忽戸字権現作 233-2
- 3 詳細分布調査は、令和5年度に千葉県教育委員会の支援を受けて、南房総市教育委員会が主体となって実施した。
- 4 本書の執筆は、第1章第1節を社会教育係長 野中祐介が、その他は千葉県教育委員会文化財課 文化財主事 岡山亮子が行い、編集は岡山が行った。
- 5 詳細分布調査から報告書刊行に至るまで、次の諸機関・諸氏に多くのご協力・ご指導いただいた。

土地所有者の石川良一氏には、所有地の試掘を快くご承諾いただいた。

木更津市教育委員会 松本勝氏に、中近世陶器についてご指導・ご助言をいただいた。

千葉県教育委員会 村松裕南氏に、人骨及び動物遺存体についてご指導・ご助言をいただいた。

公益財団法人千葉県教育振興財團文化財センター 小川慶一郎氏に、動物遺存体についてご指導・ご助言をいただいた。

新井文夫氏・田中和行氏・千倉印刷所 加藤由美子氏・當眞嗣司氏・蜂屋孝之氏・速水成美氏・山田俊輔氏など多くの方々にご協力をいただいた。
- 6 図面の方位はすべて座標北である。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第2図・第6図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「千倉」令和4年を編集

第3図 国土地理院ウェブサイト (<https://maps.gsi.go.jp>) の傾斜量図を編集

第4図 南房総市発行 1/2,500 南房総市地形図を編集

第5図 5万分の1地質図幅「館山」GISデータ（産総研地質調査総合センター）  
([https://gbank.gsj.jp/geonavi/docdata/data/org\\_data/wxga\\_1013\\_org\\_1013.jpg](https://gbank.gsj.jp/geonavi/docdata/data/org_data/wxga_1013_org_1013.jpg))  
を加筆修正
- 8 図版1の航空写真是、忽戸小学校閉校時に撮影したものを使用した。  
図版2の航空写真是、国土地理院発行による2017年に撮影したものを使用した。
- 9 挿図に使用したスクリーントーンは、赤彩された土器は赤色で、須恵器は断面を黒色で、黒色処理された土器は灰色で表現した。

## 本文目次

第1章 はじめに ······	1
第1節 調査の概要 ······	1
第2節 遺跡の位置と環境 ······	5
第2章 試掘の成果 ······	12
第1節 遺跡の概要 ······	12
第2節 採集遺物・出土遺物 ······	14
第3節 人骨 ······	18
第4節 動物遺存体 ······	18
第3章 詳細分布調査の成果 ······	19
第1節 千倉町域の洞窟 ······	19
第2節 市内の洞窟 ······	20
第4章 総括 ······	22
第1節 忽戸魚見根洞窟遺跡の調査成果 ······	22
第2節 忽戸魚見根洞窟遺跡の重要性 ······	23
第3節 忽戸魚見根洞窟遺跡の保存と活用について ······	23
第4節 今後の課題 ······	23

報告書抄録

## 挿図目次

第1図 絵葉書【千葉県千倉町名所】	11
魚見根公園ヨリ千倉町ヲ望ム ······ 2	
第2図 遺跡の位置 (1/25,000) ······ 3	
第3図 傾斜量図での遺跡の位置 (1/25,000) ······ 3	
第4図 遺跡の位置 (1/5,000) ······ 4	
第5図 周辺地質図 ······ 6	
第6図 忽戸魚見根洞窟遺跡と周辺の遺跡 ······ 9	
第7図 健田遺跡群調査成果 ······ 11	
第8図 洞窟平面図 (1/80) ······ 13	
第9図 トレンチ設定図 (1/100) ······	
エレベーション図 (1/100) ······ 14	
セクション図 (1/40) ······ 17	
第10図 採集遺物・出土遺物 ······ 17	
第11図 貝類(サザエ)殻高分布図 ······ 18	

## 表目次

第1表 周辺遺跡一覧 ······ 10	第5表 人骨観察表 ······ 18
第2表 健田遺跡群調査歴 ······ 10	第6表 脊椎動物観察表 ······ 18
第3表 土器観察表 ······ 16	第7表 貝類(サザエ)殻高一覧表 ······ 18
第4表 錢貨観察表 ······ 18	第8表 貝類(アワビ)殻長一覧表 ······ 18

## 図版目次

図版1 遺跡周辺航空写真1	図版5 人骨・脊椎動物遺存体
図版2 遺跡周辺航空写真2	図版6 採集貝類
図版3 現地踏査・試掘実施状況	図版7 市内の洞窟1
図版4 採集遺物・出土遺物	図版8 市内の洞窟2

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の概要

### 1 調査の目的と経緯

忽戸魚見根洞窟遺跡は、南房総市千倉町忽戸に所在する遺跡で、私立公園整備中の不時発見を契機とし、埋蔵文化財包蔵地として登載された。遺跡名は本来であれば所在地の字名を付すべきであるが、所在地背後の丘陵が魚見根山と呼称されていることから大字である忽戸と併せて遺跡名とした。

令和3～4年にかけて、土地地権者の石川良一氏が公園整備の一環で遊歩道を整備していたところ、土砂に埋没した横穴を発見した。土砂を撤去してもなお奥に続いている、さらに土師器などが採集されたため、令和4年9月に石川氏から南房総市教育委員会に情報提供があった。同年10月に千葉県・市教育委員会で現地踏査を行い、立地などの周辺環境や多くの採集資料から、まだ認識されていない新発見の洞窟遺跡であることを確認した。隣接する館山市では、千葉県指定史跡である安房神社洞窟遺跡をはじめとして複数の洞窟遺跡の所在が知られているが、本市のいわゆる外房地域では、こうした遺跡の存在は確認されていなかった。このため本遺跡と遺跡周辺を含めた地域で、新たな資料と知見を得る目的で、市教育委員会が詳細分布調査とそれに伴い、洞窟内部の試掘を実施することとした。しかし、本市には埋蔵文化財専門職員が未配置であるため、県教育委員会の技術支援を受けながら、事業を実施することとなった。

調査組織及び整理作業期間は下記のとおりである。

#### 詳細分布調査

調査組織 南房総市教育委員会生涯学習課

課長 根形貴洋 課長補佐 宇山隆一

担当者 社会教育係長 野中祐介

技術支援 千葉県教育庁教育振興部文化財課

副課長 四柳隆 埋蔵文化財班長 水塚俊司

地区担当 文化財主事 岡山亮子

実施期間 令和5年4月27日～令和5年4月28日

内容 試掘4m<sup>2</sup>、周辺地域の詳細分布調査

#### 整理作業

原稿執筆 南房総市教育委員会生涯学習課 社会教育係長 野中祐介

千葉県教育庁教育振興部文化財課 文化財主事 岡山亮子

実施期間 令和5年6月30日～令和5年11月24日

内容 水洗～報告書刊行

## 2 調査の方法

詳細分布調査は、過去の調査成果により市内で開口していることが知られている洞窟の現地踏査を行った。

また、忽戸魚見根洞窟遺跡の洞内を試掘した。地権者による土砂の撤去により深く掘りくぼめられていた範囲の内、4 m<sup>2</sup>を試掘トレンチとして設定し、層序の把握のため人力による平面的な掘り下げを行った。約0.3 m掘削を進めると、土器や古錢が出土すると共に、炭化材や骨片の検出があり、土器などの出土から遺跡であることが確認できたため、それ以下の掘削は見合わせることにした。洞窟内部は狭長で天井高も低かったことから記録作成は困難を極め、レベルは開口部側しか据えることができなかった。平面図は任意座標による遺り方測量とし、セクション図は手実測で行った。写真撮影はデジタルカメラにより実施した。

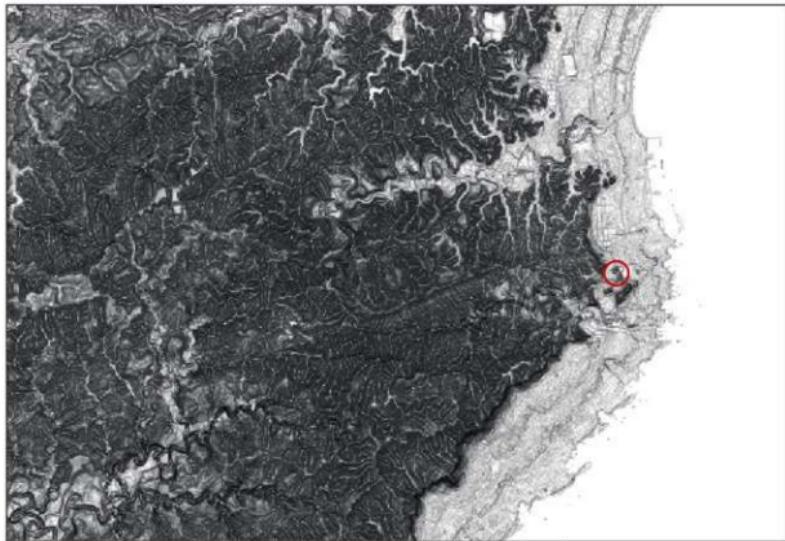
地権者と協議の結果、地権者による採集遺物を含めた報告書を作成することとした。整理作業は、採集遺物と市教育委員会による試掘で出土した遺物の水洗を行った後、実測作業等を行った。並行して図面・写真的記録整理の後、挿図・写真図版をデジタル編集により作成した。その後、原稿執筆・編集・校正作業を経て、報告書刊行に至った。



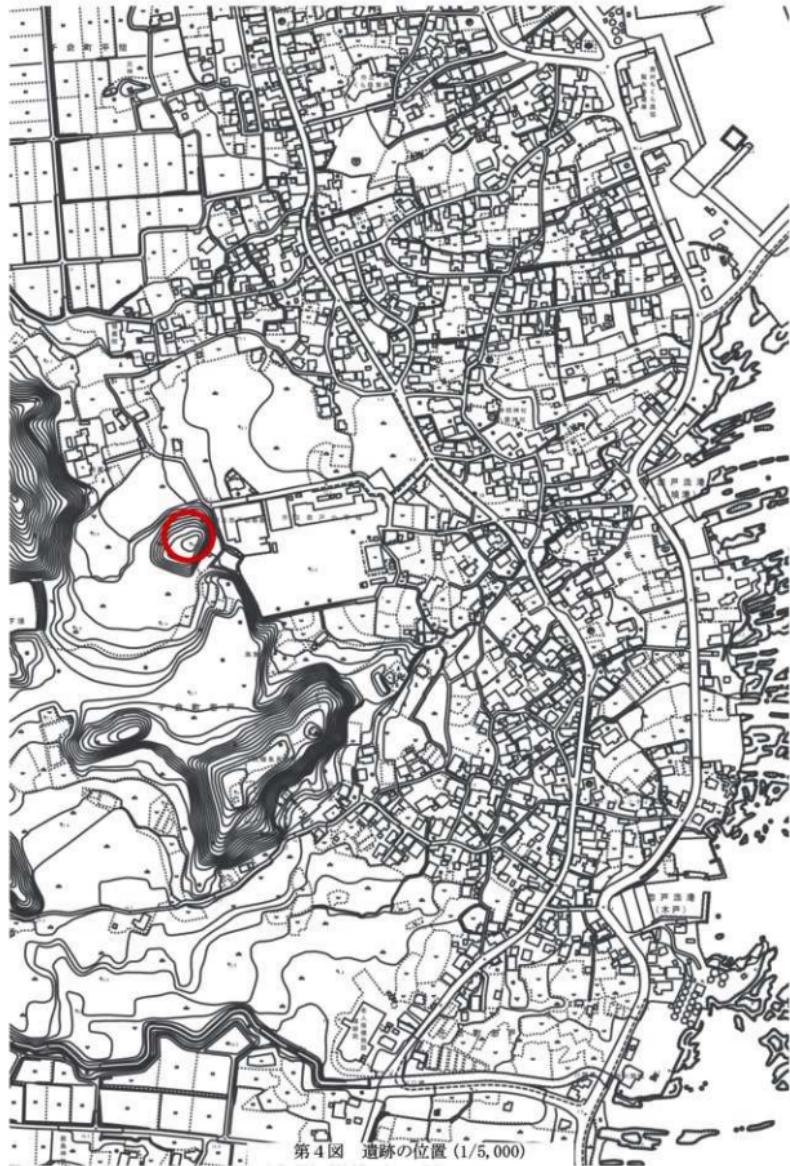
第1図 絵葉書 【千葉縣千倉町名所】魚見根公園ヨリ千倉町ヲ望ム  
手前左側の建物は、昭和3(1928)年竣工の忽戸小学校校舎  
このため遺跡は写真左側に見切れている



第2図 遺跡の位置 (1/25,000)



第3図 傾斜量図での遺跡の位置 (1/25,000)



第4図 遺跡の位置 (1/5,000)

## 第2節 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境（第2～5図）

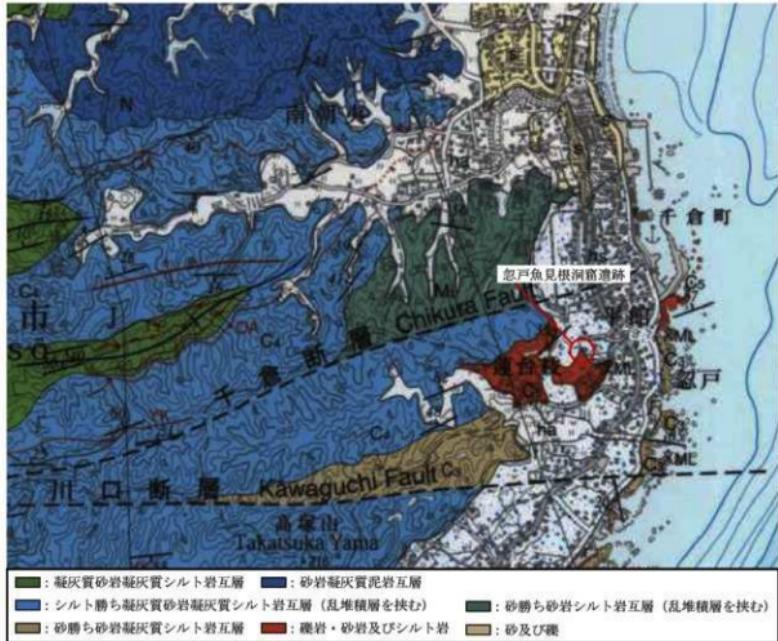
千葉県は、本州中央部の東端に位置し、東西に狭く、太平洋と東京湾に囲まれた南北に長い半島（房総半島）にある。太平洋と東京湾に囲まれた半島部の海岸線と、北部と西部を流れる利根川・江戸川に囲まれている。南から北に向かって大きく丘陵部・台地部・平野部に大別される。

南房総市は、平成18年3月に安房郡を構成していた6町1村（富浦町、富山町、三芳村、白浜町、千倉町、丸山町、和田町）が合併して誕生した。本市は、県南端に位置し、館山市を包むように市域を形成している。東西約46.5km、南北約57km、面積229.55㎢で、館山市の他には、北は鋸南町及び鴨川市と接しており、西は太平洋、東は東京湾に面している。

市中心部から北部にかけて安房丘陵と呼ばれる山地が広がり、その間に狭隘な平地が帶状に展開した複雑な地形を擁している。南部は海岸沿いが平地となっており、内陸部は丘陵が展開している。忽戸魚見根洞窟遺跡は、市南東部に位置する千倉町忽戸に所在する。忽戸は、西部に安房丘陵が連なり、東部は太平洋に面している。忽戸を含む、館山市南部から千倉町川尻川以南にかけて安房丘陵を取り囲む帶状に、海岸沿いの幅約1kmに海岸段丘の低地が分布しており、この段丘は過去の地震により、かつての波食棚などが隆起して陸地化したものである。これらの段丘は沼面群と呼ばれ、大きく4面に分類されている。上層から順に沼I面(6,300年前・標高20～25m)・沼I'面(5,800年前)・沼II面(3,000年前・標高13～15m)・沼III面(2,200年前・標高9～10m)・沼IV面(元禄16(1703)年・標高5m)で、その下位に大正ベンチと呼ばれる標高1～2mの波食棚が分布している。本遺跡が位置するのは、標高約20～25mの段丘上で沼I面に相当する。このため本遺跡は、波食作用によってできた海食洞であり、現在の海岸線からは約0.5km離れている。

市南部の地質は、東西に帯状構造を持つ中新世後期の三浦層群、上総層群の豊房層、完新世の沖積層が分布する。この内、遺跡周辺は三浦層群の千倉層で構成される。褶曲と断層による層序を繰り返し、不整合に堆積した地層は、主に凝灰岩質砂岩、凝灰岩質シルト岩の互層からなる。太平洋沿いは、忽戸から川口にかけての約1.3kmにわたって屏風岩と呼ばれる地層が見られる。これは、太平洋プレートがユーラシアプレートに押し寄せる力でうねった褶曲構造による地層の一部で、波の浸食によって固い部分が残されたものである。そのため忽戸付近の太平洋岸は「忽戸ノ鼻」と呼ばれており、岩礁が多いことに加えて、他と比べて波浪が高く時々急潮を生ずるため、航海上の危険地とされている。忽戸の海岸の礫岩中にはシロウリガイ化石が産出する。水深1,000m前後の深海に生息する二枚貝で、市内白浜町白浜で産出する化石は県の天然記念物に指定されている。

遺跡の北側には二級河川の瀬戸川や川尻川が東西方向に流れ、太平洋に注いでいる。河川はそれぞれ延長7.5km、1.0kmとその距離は長くない。本遺跡の南西約2.1kmに位置する標高216mの高塚山が周辺地域における最高点で、このことから河川の流れは急ではなく、比較的緩やかである。本遺跡近くの丘陵端部には、灰汁井戸と呼ばれる湧水がある。弘法大師伝説が残されているこの井戸は、一年中湧水量に変わりがなく、昭和50年代まで生活用水として使われていたと伝えられている。



第5図 周辺地質図

## 2 歴史的環境（第6～7図・第1～2表）

忽戸魚見根洞窟遺跡周辺では、縄文時代から近世まで各時代の遺跡が確認されている。

遺跡の所在する千倉町では、遺跡の立地条件が次のとおり分類される。1類：川尻川以南の狭い平地と山に続く斜面に立地（永崎堂遺跡（2）など）、2類：砂丘列上または砂丘列の背後に立地する遺跡群（谷遺跡（14）など）、3類：丘陵と広い段丘上に広がる大規模な遺跡群（川合遺跡（38）など）、4類：狭い谷間に臨む山裾または段丘上に位置する小規模遺跡群（長井遺跡（40）など）である。そして丘陵斜面部に横穴墓・やぐらが立地している。海岸沿いは過去の地震により隆起した波食棚や砂洲であるため、遺跡は確認できない。丘陵部は遺跡の分布が希薄であるが、大部分が山林で十分に現地踏査が行われていないためである。令和元年房総半島台風以後はさらに倒木が道を塞ぎ、一層山林への立ち入りが困難となっているが、本遺跡のように今後、新たな遺跡が発見される可能性がある。

さて、千倉町での発掘調査の代表例として、健田遺跡群の調査が挙げられる。朝夷地区教育委員会は昭和49（1974）年から平成元（1989）年まで、奈良県奈良市平城宮跡出土木簡にみられる「朝夷郡健田郷」の所在地確認を目的とした13次に及ぶ発掘調査を実施した。直接的に健田郷の所在地を特定するには至らなかったが、発掘調査件数が少ない安房地域においては、古代の様相解明のため多くの成果が得られた。

薬師前堀ノ内遺跡(41)は、複数年度にわたって地点を変えながら発掘調査が実施された。特筆すべきなのは、第4次調査で竪穴住居跡から出土した畿内産土師器である。これは底部内面に螺旋状暗文、体部内面には放射状暗文が施され、7世紀第3四半期に位置付けられる。さらに、8世紀代に位置付けられる湖西産須恵器が出土している。こうした遺物の出土は直接的に朝夷郷の推定地を示すことはならないが、当時の周辺地域の中心地であったことが示唆される。

瀬戸遺跡(23)は、第3次調査地点の稻子沢遺跡、第6・7次調査地点の駒形遺跡を含む複合遺跡である。駒形遺跡では竪穴住居跡から手焙形土器が出土している。この竪穴住居跡を掘り込む形で時期不明の土坑が切り合っているが、土坑覆土から仿製小形重圓文鏡が出土している。

谷遺跡(14)は、第8次調査で発掘調査を実施した。縄文時代の竪穴住居跡が検出されているが、縄文土器の多くは遺構外から出土している。前期の繊維土器、中期の勝坂式・加曾利E式などが出土している。他に古墳時代前期の竪穴住居跡2軒の検出、三巴文の鏡瓦の出土があった。

大溝遺跡(11)は、第5次調査で発掘調査を実施した。縄文土器が出土したほか、古墳時代のいわゆる鬼高式土器の完形が集中して出土した。遺構は削平されているとみられ、検出できなかった。近世の土塙墓からは寛永通宝を伴った人骨が出土している。

日向薬師横穴群(43)は、第9～10次に発掘調査を実施した。奥壁・天井・側壁が崩落しており、玄室と羨道の一部が残存していた。棺床等の内部施設は備えておらず、床面全体に煤が付着している。玄室内からは人骨と歯、須恵器などが出土している。須恵器の年代は7世紀代に位置付けられる。

本郷上之岱古墳群(46)の内の1基(3号墳)である上之岱古墳は、第10～13次に測量・発掘調査を実施した。周溝が全周しないことなど不明確な点が多いが、墳長37mの前方後円墳と考えられている。墳頂部は盜掘坑があり、主体部は検出されなかつたが、盜掘坑覆土から水晶製切子玉やガラス小玉が出土したことから竪穴系の埋葬施設が存在していた可能性が想定されている。

次に、上記の健田遺跡群を除く各時代の状況を概観する。

旧石器時代の遺構・遺物は、本遺跡周辺地域では検出されていない。市内では富浦町多田良所在の大房岬遺跡で石槍などが採集されている限りである。

縄文時代では、大和田遺跡(24)などの包蔵地が所在する。駒寄遺跡(36)で黒曜石製の石鏃が採集されている。千倉町北朝夷所在の円蔵院周辺でも黒曜石片を採集したという地元住民がいることから未発見の遺跡が遺存している可能性もある。南組低地遺跡(南祖遺跡)では明治45(1912)年に独木舟が出土したが、焼失のため現存せず、遺跡の位置も現在では不明となっている。

弥生時代では、平川遺跡(30)などの包蔵地が所在する。

古墳時代では、高塚山古墳(10)や大和田古墳(25)とそれぞれ径15m・18mの円墳が丘陵上に築造される。一方、横穴墓は丘陵斜面部や端部に所在し、谷津もしくは海岸低地に向かって開口している。多くは、土砂の流入や自然崩落により内部構造が明らかではない。田貝塚横穴群(17)は10基の横穴群で、ドーム状天井を有し、両袖式玄室の玄室内には棺室を備える構造となっている。

奈良時代以降は安房国となり、このうち千倉町は安房国朝夷郡に比定されている。安房国は、養老2(718)年に上総国から平群・安房・朝夷・長狭の4郡に分けて誕生した。その後、天平13(741)年に上総国に併合されるが、天平宝字元(757)年には再び上総国から独立することになった。

7世紀後半から8世紀後半にかけて編纂された『万葉集』に「朝夷郡上丁丸子連大歳」が詠んだ「家風は日に日に吹けど我妹子が家言持ちて来る人もなし」という防人歌が収録されている。丸子大歳は生没年などは不明だが、天平勝宝7(755)年に防人として筑紫に派遣された。また、文献史料としては延長5(927)年完成の『延喜式』に「小社 下立松原神社」とある。千倉町牧田に同名の神社が鎮座している。ただし、市内白浜町滝口にも同名を称する神社が所在しており、『延喜式』に著された下立松原神社がどちらを指すかは明らかではない。

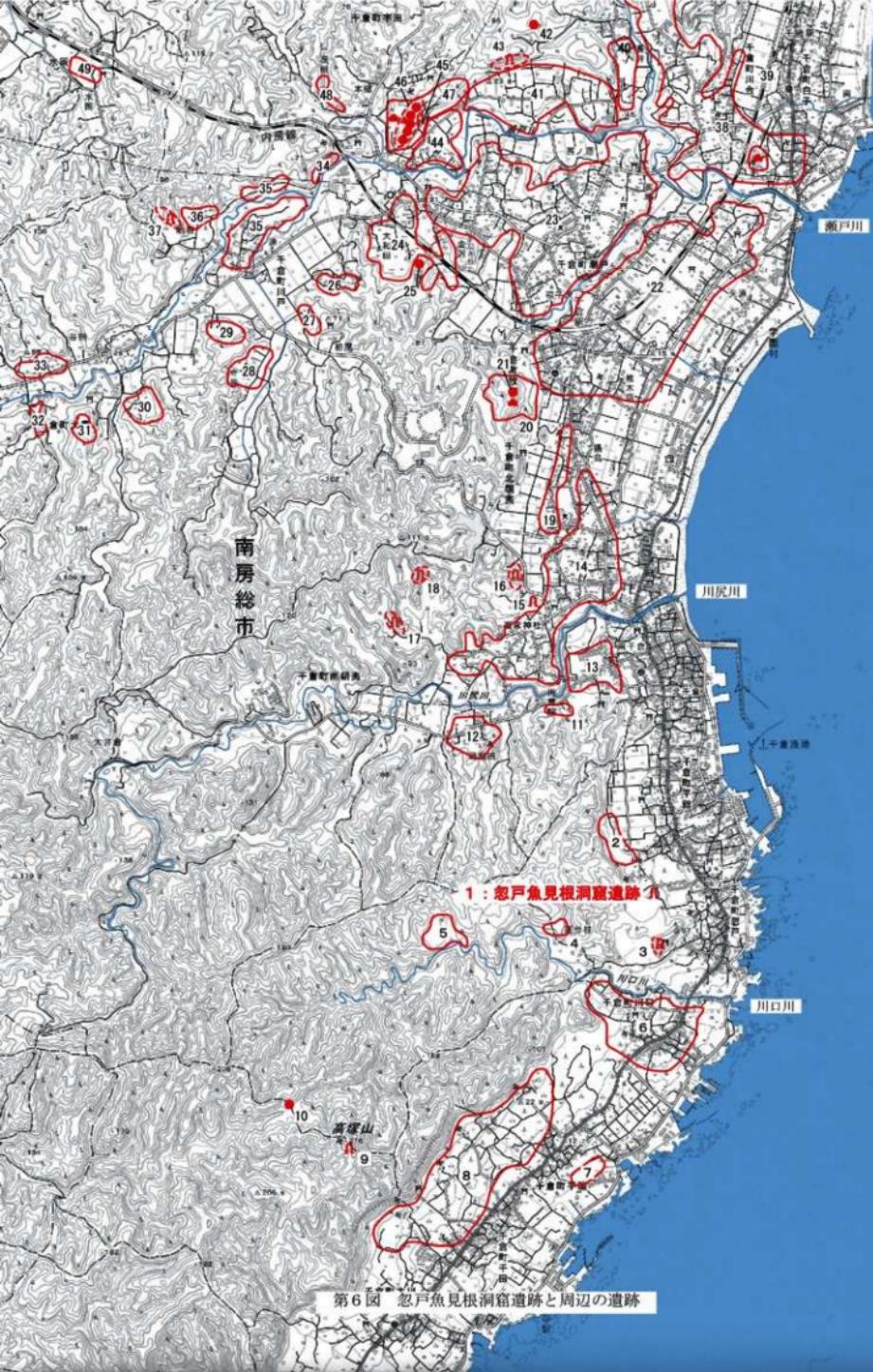
中世の安房・上総地域は、戦国大名里見氏が治めていた。千倉町に里見氏直轄の城郭は確認されていないが、在地領主が治めていたとされる宇田城跡(47)が所在する。曲輪や切岸を造り出しており、15世紀代の築城とされている。中世のやぐらは、丘陵斜面部や端部に所在する。本遺跡に程近い永崎堂境内にも所在している。これは今回の詳細分布調査で発見した遺跡であり、今後埋蔵文化財包蔵地として登載する予定である。

近世期の江戸幕府は、寛永16(1639)年から嘉永6(1853)年までオランダと中国、朝鮮を除く外交を禁止した鎖国体制を保っていた。文化7(1810)年には会津藩と白河藩が江戸湾のそれぞれ相州側と房総側の警護を命じられて海防体制がとられる。文化7(1810)年、老中松平定信が梅ヶ丘遠見台跡(39)を海防警備の遠見番所として設置し、白河藩、後に忍藩の領地となった。安政元(1854)年の異国船来航時には、梅ヶ丘遠見台の代官が黒馬に乗って北条陣屋跡に報告したと伝えられている。また、松平忠固が老中に宛てた異国船出現の一報においても「安房國白子遠見番所より、辰巳之方に当り、十里程沖合に、異國船壹艘相見」とある。現在の川口川河口付近には弘化4(1847)年以降、砲台が設置され、嘉永4(1851)年に幕府の命を受けて制作された『近海見分之図』に「忽戸村炮臺」とみえる。海防意識の高まりの中で、寛政12(1800)年から文化13(1816)年にかけて伊能忠敬が日本地図作成のために全国各地で測量を行った。千倉を訪れたのは享和元(1801)年で『忠敬先生日記』の中で、忽戸について「忽戸村 大岡主膳正領分 村高二百四十一石五斗八升五号 家数百軒 外寺二ヶ所堂二ヶ所 人別千二百四十七人」と記されている。

忽戸は明治維新時には長尾藩であったが、その後明治4(1871)年に長尾県、明治6(1873)年に木更津県、明治22(1889)年に曇村、明治33(1900)年曇町、大正9(1920)年千倉町に編入した。

ところで、忽戸という地名は難読地名である。この地名の由来は明らかではないが、「戸」は、戸口や処を表すとされているが、「忽」の語義は不明である。宝暦11(1761)年に中村国香が著した『房総志料』に「古渡津」という地名がみえる。この「古渡津」が現在の忽戸と同範囲を示す地名であるかは不明である。さらに、地元では、かつて厨子が海を漂っており、この厨子が川を上り、忽ち戸が開いて、中の薬師如来像が現れた。このため場所を忽戸と呼び始めたとの言い伝えが残されている。

信仰の場としては、魚見根山に荒磯魚見根神社が鎮座している。この神社には県指定無形民俗文化財の三番叟が伝えられている。かつて房州一帯が早魃に見舞われた際に、奈良の春日大社から舞の伝授を受けて奉納したところ雨が降ったとされていることから現在に至るまで伝承され、奉納1週間前から精進潔斎した少年達が舞うことが最大の特徴である。明治16(1883)年の陸軍参謀本部作成の迅速測図原図には「春日社」の表記がみられる。



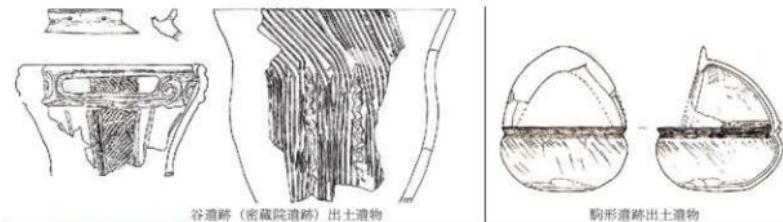
第6図 忽戸魚見根洞窟遺跡と周辺の遺跡

第1表 周辺遺跡一覧

遺跡名	種別	時代	遺跡名	種別	時代
1 忽戸見根洞窟遺跡 (洞窟遺跡)	その他 古墳、奈良、平安、中世、近世	25大和田古墳 26川戸遺跡 27川戸神社遺跡	古墳 古墳地 古墳地	古墳 古墳地 古墳地	古墳 平安 平安
2 木綿堂遺跡	古墳地				
3 魚見根社櫛穴群	横穴墓	古墳	28大谷遺跡	古墳地	平安
4 鹿枝台遺跡	古墳地	古墳	29和田遺跡	古墳地	平安
5 小坂遺跡	古墳地	調査	30平川遺跡	古墳地	弥生、平安
6 川口遺跡	古墳地	古墳	31芦戸遺跡	古墳地	平安
7 平坂遺跡	古墳地	古墳、平安、近世	32坂足遺跡	古墳地	平安
8 七瀬遺跡	古墳地	調査、古墳、平安	33尾谷遺跡	古墳地	平安
9 佐原山やぐら	やぐら	中世、近世	34新重石遺跡	古墳地	弥生
10 高塚山古墳	古墳、深	古墳、中世、近世	35京瀬跡	古墳地	奈良、平安
11 大溝遺跡	古墳地、集落跡、生糞遺跡	調査、弥生、古墳	36大畠遺跡 37阿倍根穴群	古墳地 横穴墓	調査 古墳
12 潟瀬田遺跡	古墳地	弥生、古墳、奈良、平安	38川合遺跡	集落跡、墳墓跡	調査、弥生、古墳、奈良、平安
13 潟瀬田小学校遺跡	古墳地		39海丘丘陵見台跡	礫堆跡	近世
14 谷瀬跡	古墳地		40長井遺跡	古墳地	弥生、古墳、奈良、平安
15 大仏山櫛穴群	横穴墓	古墳	41粟田遺跡群 (粟田遺跡内 / 内遺跡)	集落跡、生糞遺跡、その他の墓	調査、弥生、古墳、奈良、平安
16 谷穂穴群	横穴墓	古墳	42粟田寺古墳	古墳	古墳
17 山口堆積穴群	横穴墓	古墳	43日向豪御櫛穴群	横穴墓	古墳
18 佐和神社裏櫛穴群	横穴墓	古墳	44新川遺跡	古墳地	調査、弥生、古墳
19 鶴島遺跡	古墳地	古墳、奈良、平安	45木根遺跡	横穴墓	古墳
20 収田石若跡	城跡跡	中世	46木根上ノ活古墳群	古墳	古墳
21 釜屋塚	塚	中世、近世	47子田城跡	城跡跡	中世
22 収田遺跡	集落跡	弥生、古墳、奈良、平安	48子田遺跡	古墳地	調査
23 丹波遺跡群	集落跡、貝塚	調査、弥生、古墳、奈良、平安	49水元掘之内遺跡	城跡跡	中世
24 大和田遺跡	古墳地	調査、弥生、奈良、平安			

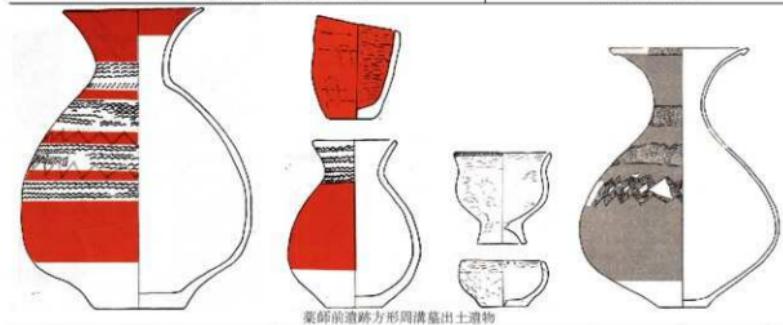
第2表 健田遺跡群調査歴

調査年次	遺跡名	調査地	調査期間	遺構	遺物
1	健田遺跡群 (楽師前遺跡)	戸戸字脇ノ内 278 - 279 (A地区) (楽師前遺跡) (B地区)	S49. 12. 5 ~ 12. 29	A地区：弥生時代後期窓穴住居跡2軒、土壙墓1基、調査構造2条 B地区：奈良、平安時代堅穴住居跡5軒、土壙構造1条	A地区：弥生土器 B地区：土師器、鉄鏃、刀子
2	健田遺跡群	戸戸字脇前 430 ~ 423	S52. 7. 23 ~ 8. 13	弥生時代堅穴住居跡13軒、古墳時代堅穴住居跡5軒、奈良時代堅穴住居跡4軒、時期不明堅穴住居跡6軒、堅穴構造2条、堅穴状造築1基	弥生土器、土師器
3	健田遺跡群 (戸戸遺跡) 稲子沢遺跡	戸戸字稲子沢 2123番地ほか	S53. 7. 24 ~ 8. 11	弥生時代方形周溝墓1基、弥生後期堅穴住居跡2軒、古墳時代堅穴住居跡3軒、奈良時代土坑1基、ガラス小玉、滑石、磁石、管玉、鉄製品、宋錢	弥生土器、土師器、土埴輪、勾玉、管玉、ガラス小玉、滑石、磁石、鉄製品、宋錢
4	健田遺跡群 (楽師前遺跡)	戸戸字脇前 449番地ほか	S54. 8. 16 ~ 9. 8 (A地点) S54. 12. 17 ~ 12. 28 (B地点)	A地点：弥生時代方形周溝墓1基、古墳～奈良時代堅穴住居跡1軒、奈良時堅穴住居跡4軒、時期不明堅穴住居跡4軒、堅穴構造1条、B地点：弥生時代堅穴住居跡1軒、時期不明堅穴住居跡1軒、堅穴構造6条、ビット群1基	弥生土器、土師器、須恵器、石製品、刀子
5	大溝遺跡	南朝夷 1828	S55. 6. 25 ~ 27 7. 25 ~ 8. 5	古墳時代堅穴住居跡1条、近世土壙墓1基、時期不明土壙1基、ビット群	調文土器、滑石製块状耳鉢、黑曜石製石鏃、石核、剥片、土師器、瑪瑙製勾玉、網銭
6	健田遺跡群 毫胸形遺跡	牧田字胸形 96 - 97番地	S56. 8. 20 ~ 8. 30	弥生末～古墳時代堅穴住居跡3軒、時期不明堅穴住居跡1軒	弥生土器、土師器、須恵器、鐵鏃、小口銅鏡
7	健田遺跡群 (戸戸遺跡) 毫胸形遺跡 樂師前遺跡	牧田字胸形 96 - 97 戸戸 404-1	S57. 7. 22 ~ 7. 31	胸形遺跡、弥生末～古墳前期堅穴住居跡1軒、時期不明堅穴住居跡1軒、堅穴構造5条、ビット群	弥生土器、土師器
8	谷筋跡 (茅藏院遺跡)	北朝夷 2396	S58. 8. 22 ~ 8. 31	調文時代堅穴住居跡1軒、古墳時代堅穴住居跡2軒	調文土器、石器、土製品
9	健田遺跡群 (楽師前遺跡)	戸戸字五反田 596-1	S60. 8. 26 ~ 9. 4	古墳時代堅穴住居跡1軒、奈良時代堅穴住居跡5軒、時期不明堅穴住居跡1軒、堅穴構造2条、土壙1基、ビット3基	弥生土器、土師器、銅錢、鐵製品
10	日向豪御櫛穴群 (楽師前遺跡) 木根古墳群 上之岱古墳	戸戸 596-1 戸戸 757	S61. 8. 28 ~ 9. 7 S61. 8. 28 ~ 9. 7	古墳時代堅穴住居跡1基	須恵器
11			S62. 8. 24 ~ 9. 2	古墳時代前方後円墳1基	—
12	本郷古墳群 上之岱古墳		S63. 8. 21 ~ 8. 31	古墳時代前方後円墳1基	水晶製切子玉、ガラス小玉
13			H. 8. 26 ~ 9. 5		

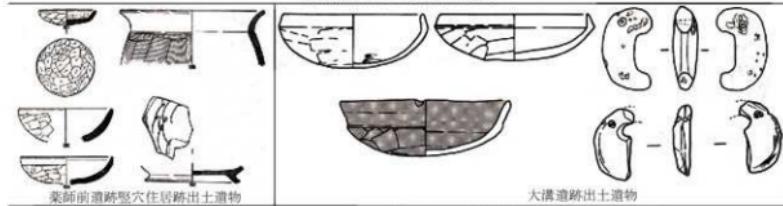


谷遺跡(密蔵院遺跡)出土遺物

駒形遺跡出土遺物

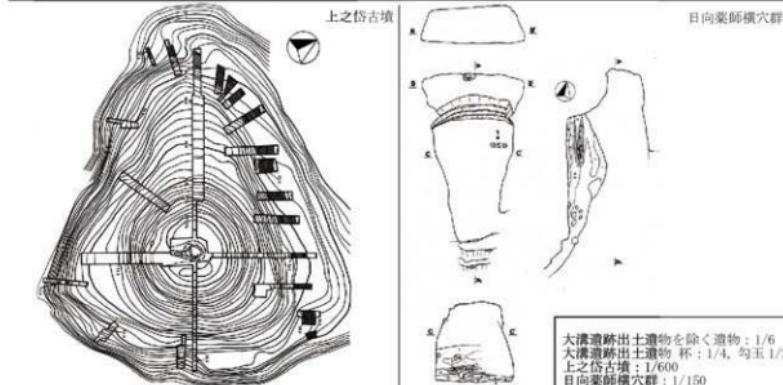


薬師前遺跡方形周溝墓出土遺物



薬師前遺跡堅穴居跡出土遺物

大溝遺跡出土遺物



第7図 健田遺跡群調査成果

大溝遺跡出土遺物を除く遺物 : 1/6  
大溝遺跡出土遺物 杯 : 1/4, 勾玉 1/2  
上之岱古墳 : 1/600  
日向薬師横穴群 : 1/150

## 第2章 試掘の成果

### 第1節 遺跡の概要（第8～9図）

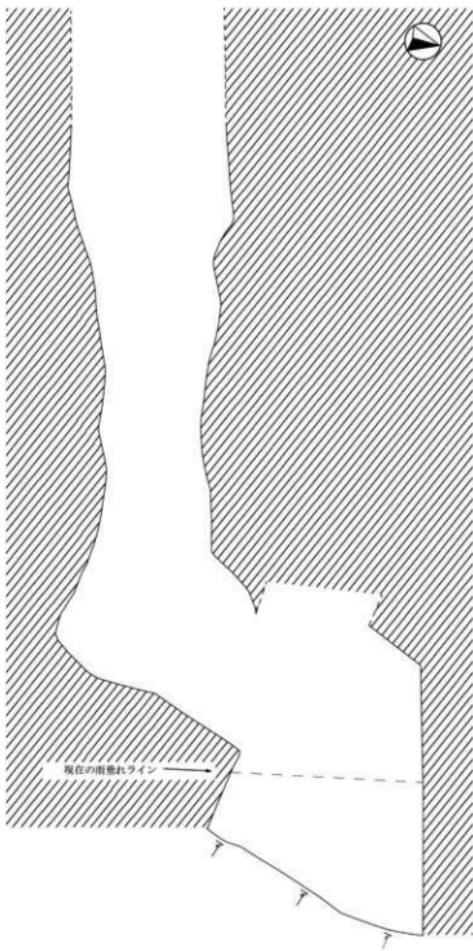
忽戸魚見根洞窟遺跡は、約6,300年前に地震によって隆起した沼Ⅰ面に立地し、太平洋に面した東向きに開口する海食洞窟に営まれた遺跡である。本遺跡の平面形は、東西方向に延びる柄の長い羽子板状を呈し、天井部はアーチ状に近い斜行の断面形となっている。現況での洞窟の規模は、奥行き約12m以上、高さ約0.4～1.0m、幅約1.2～1.54mである。洞窟の最奥部は、天井部の落盤で視界を遮られていることに加えて、匍匐前進ですら入り込めない高さであるために確認できていない。試掘を実施する際に殺虫剤を散布したところ、丘陵外はほぼ無風であったにも関わらず煙が奥に流れていった。のことから奥壁は存在せず、丘陵を突き抜けている可能性があるなど洞窟の全貌は未解明である。昭和53(1978)年の忽戸小学校校舎改修時に丘陵が削平され、その結果、丘陵の東側は急崖面となっており、既に洞窟前部は失われてしまっている。現開口部から洞内を進むと二又に分かれている。分歧北側も含めて遺跡と捉えるべきか検討したが、遺跡の採集状況から南側部分のみを遺跡として判断することとした。

試掘は、洞内に2×2mのトレンチ1か所を設定した。既に掘りくぼんでいた洞窟中央部に設定し、洞内の堆積状況の確認を目的とした。土層セクションは、洞内を横断する南北方向（トレンチ西壁）1本を記録した。洞内北側は土層堆積がみられたが、南側は岩盤が露出しており、洞窟底面が検出された状態であった。このため洞窟底面は、北に向かって斜め方向に落ち込んでいるといえる。

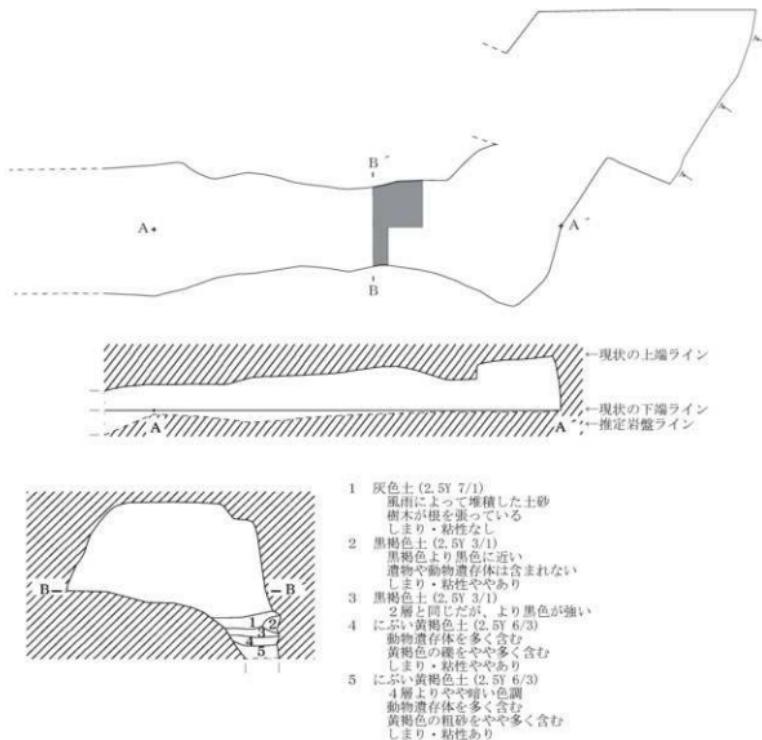
試掘で確認した層序は、表面堆積層（第9図・1層）とその下位の堆積土層（第9図・2～5層）に大別される。表面堆積層は落ち葉が混じり、しまりと粘性がないサラサラとした質感の乾燥した土層である。この層からは弥生土器と古錢（文久永寶）が同じレベルで出土しており、風成堆積により土が巻き上がった擾乱を受けている表層といえる。その一方、下位堆積土層はほぼ水平に堆積しており、動物遺存体や炭化材を含むしまりと粘性のある土層である。波や風の影響で洞窟利用時に成層したと考えられる。土中に含まれている礫や砂などの混入物の違いにより分層した。

今回の試掘では、遺物を包含する層は確認されたが、明確な生活面もしくは墓域利用など遺跡の性格を示す面は検出されなかった。トレンチの北・東側は炭化材を多く検出した印象を受けたため、何らかの遺構が遺存している可能性も考えられるが、今回の試掘だけでは判断することはできなかった。なお、炭化材は細片となっており、取り上げは困難な状況であった。

当初、採集資料に考古遺物の完形資料が多かったことから、試掘で大量の遺物が出土することを想定して調査に臨んだが、出土資料は弥生土器と文久永寶の出土に留まった。前述のとおりいずれも表層である1層からの出土で、下位堆積層から遺物は出土しなかった。動物遺存体は、細片ではあるが種同定が可能であった。炭化材や動物遺存体が遺存していたのは、海水の塩分を含んだ土の堆積や同じく洞内に遺存していたサザエなど貝類のカルシウム分の影響を受けているからだと考えられる。



第8図 洞窟平面図(1/80)



第9図 トレンチ設定図(1/100)・エレベーション図(1/100)・セクション図(1/40)

## 第2節 採集遺物・出土遺物(第10図・第3~4表・図版4~6)

### 1 地権者採集遺物

地権者が採集した遺物のうち、弥生土器1点、古墳時代土師器7点・須恵器1点、中世陶器1点、近世陶器1点、錢貨1点について図示する。他に未掲載の微細片3点がある。いずれも地権者が洞窟を掘削する中で採集された遺物である。

1は弥生土器である。壺形土器の底部で、内外面にヘラナデ、底部外面にヘラケズリが施されている。2~7は土師器の杯である。このうち、2は須恵器杯身模倣杯、3~7は須恵器杯蓋模倣杯である。2は外表面と口縁の境に明瞭な稜を有し、口縁が直立する。外表面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ、内外面の口縁部と内面中位以上にヨコナデ、内面体部中位以下に多方向のヘラケズリが施される。内外面に赤彩が施されている。未掲載の微細片の内1点が胎土や色調から同一個体の可能性

があるが、接合できない。6世紀中葉の所産と考えられる。3は外面体部と口縁の境に明瞭な稜を有し、口縁は外反して立ち上がる。外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ、外面体部中位にはヘラケズリの後に横位のミガキ。内外面の口縁部と内面中位以上にヨコナデ、内面中位以下にヘラケズリが施される。内外面に赤彩が施されている。口縁部にひずみが残り、内面のヘラケズリ痕は凹凸を残すなど成形がやや雑な印象を受ける。外面器面の一部は塩分もしくはカルシウム分の影響と考えられる灰白色の物質が膜状に付着している。円形状に灰白色物質の付着がみられない部分があり、別の土器が重ね置かれていた状況が推察できる。6世紀後葉の所産と考えられる。4は外面体部と口縁の境に稜を有するが、2・3のような鋭さはない。口縁部は弱い変曲点を持ち、外反して立ち上がる。内面口縁部にヨコナデ、内面体部下位に多方向のヘラケズリが施される。外面は器面全体に塩分等の影響と考えられる褐色灰色の物質が厚く固着しており、観察が困難である。内面に赤彩が施されている。外面もガジリ部分から赤色が観察できるため赤彩が施されていたと推察される。6世紀後葉の所産と考えられる。5は口縁部が緩やかに外反しながら、立ち上がる。外面は底部に多方向のヘラケズリ、体部は上端に無調整部分を残して横位のヘラケズリ、内外面の口縁部にヨコナデ、内面中位以下にヘラケズリが施される。外面器面には褐色灰色の物質が厚く固着、内面には膜状に付着している。内外面に赤彩が施されている。6世紀後葉の所産と考えられる。6は口縁が丸味を持ち、内湾しながら立ち上がる。外面は底部と体部に横位のヘラケズリ、内外面の口縁部と内面中位以上にヨコナデ、内面体部中位以下には多方向のヘラケズリの後に多方向のミガキが施される。外面には黒斑が認められる。内面の器面全体に褐色灰色の物質が固着しており、観察が困難であるが、黒色処理が施されている。6世紀後葉から末葉の所産と考えられる。7は口縁部をヨコナデし、小さく立ち上げているとみられる。稜線は鈍く、突出することはない。扁平な平底に近い丸底である。内面中位にミガキが施される。外面の器面全体と内面の一部には明褐色灰色の物質が固着している。2~7と同時期の安房地域の土器は、胎土に大粒の砂粒を含み、焼成不良で水洗すると溶け出してしまうような印象を受ける。今回報告の資料は胎土が緻密であり、他遺跡の出土遺物の胎土と異なる。8は土師器椀形杯である。口縁が丸味を持ち、立ち上がる。外面は体部に多方向のヘラケズリ、外面口縁部にヘラミガキ、内面全面に丁寧なミガキが施される。内外面は漆仕上げによる黒色処理が施される。外面の器面一部は灰白色の物質が固着している。7世紀中葉から後葉の所産と考えられる。9は須恵器短頸壺である。口縁部は外反しながら立ち上がる。端部は平坦だが、わずかに内傾し、棒状工具による沈線が一巡する。胴部は球胴状で最大径は中位よりもやや上に寄る。外面体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリ、内面は回転ヘラナデが施される。底部は調整が甘く、歪みのある丸底で自立しない。外面の器面一部は褐色灰色の物質が固着している。常陸產と推定され、TK 209型式と考えられる。10は常滑窯の胴部片である。一部に擦った痕跡があり、砥石転用の可能性がある。外面の器面一部は明褐色の物質が膜状に付着している。中世に帰属する唯一の資料である。11は瀬戸美濃産のいわゆる貧乏徳利である。肩部から体部上半の約1/5が残存しており、反転復元した。外面全体と口縁部内面に施釉している。12は寛永通寶である。いわゆる新寛永である。

## 2 教育委員会試掘時出土遺物

弥生土器 1 点、錢貨 1 点について図示する。市教育委員会が実施した試掘で、トレンチ外の表層を写真清掃していたところほぼ同一のレベルから出土した。1は弥生土器である。甕形土器の口縁部で、内面は輪積み痕を残し、指頭圧痕がみられる。内面は横位のハケ、外面は縦位のハケ、口唇部は棒状工具による交互押捺が施され、波状口縁としている。2は文久永寶である。

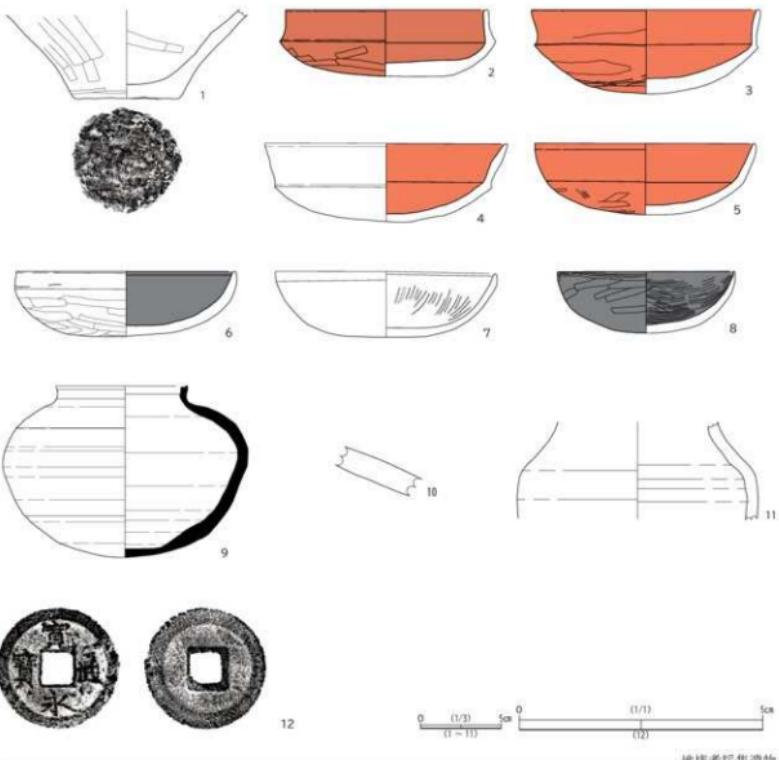
## 3 教育委員会採集遺物

市教育委員会が試掘の際に現洞窟開口部の崖下から採集した。小学校校舎建設時に丘陵を削平しており、かつての洞窟前庭部にあった可能性がある。または、地権者が現洞窟入口部分を掘削した際に土砂を崖下に搬出したとのことなので、その際に混入した可能性がある。

1は弥生土器である。甕形土器の口縁部で、内面を折り返し口縁状とし、内外面はヨコナデの後に棒状工具による交互押捺を施している。

第3表 土器観察表

No.	種類	形態	寸法(cm)	保存度	地 手	色 質	特 徴	備 考
採集 1	弥生土器	甕形土器 底径 認高	6.6 — —	底部 — —	白色砂粒。黒雲母片 小石	内面 こぶし・凹(7.5W5/4)	内面 ハラナデ	
						外面部 明褐色(7.5W8/1)	外面部 ハラナデ	
						底成 良好	底面部 ハラケズリ	
採集 2	土師器	杯 底径 認高	12.4 — 4.1	60%	白色砂粒	内面 明褐色(7.5W5/6)	内面 ハラナデ、ハラケズリ	内外面赤彩
						外面部 明褐色(7.5W5/6)	外面部 ハラナデ、ハラケズリ	
						底成 良好	底面部 ハラケズリ	
採集 3	土師器	杯 底径 認高	14.0 — 8.1	完存 — —	白色砂粒。黒雲母片 —	内面 明褐色(7.5W8/1)	内面 ハラナデ、ハラケズリ、ミガキ	内外面赤彩 外面部質付着
						外面部 明褐色(7.5W8/6)	外面部 ハラナデ、ハラケズリ、ミガキ	
						底成 良好	底面部 ハラケズリ	
採集 4	土師器	杯 底径 認高	14.9 — 4.9	完存 — —	白色砂粒	内面 明褐色(7.5W5/6)	内面 ハラナデ、ハラケズリ	内外面赤彩 外面部質付着
						外面部 明褐色(7.5W5/1)	外面部 ハラナデ	
						底成 良好	底面部 ハラケズリ	
採集 5	土師器	杯 底径 認高	13.5 — 4.4	完存 — —	白色砂粒	内面 明褐色(7.5W5/6)	内面 ハラナデ、ハラケズリ	内外面赤彩 外面部質付着
						外面部 周灰(7.5W6/1)	外面部 ハラナデ、ハラケズリ、ミガキ	
						底成 良好	底面部 ハラケズリ	
採集 6	土師器	杯 底径 認高	13.5 — 4.0	完存 — —	白色砂粒	内面 こぶし・凹(7.5W6/3)	内面 ハラナデ、ハラケズリ	内面黒色処理 内面部質付着
						外面部 明褐色(7.5W7/2)	外面部 ハラナデ、ハラケズリ、ミガキ	
						底成 良好	底面部 ハラケズリ	
採集 7	土師器	杯 底径 認高	13.6 — 4.1	完存 — —	白色砂粒	内面 明褐色(7.5W5/1)	内面 ハラナデ、ミガキ	内外面黒色処理 内面部質付着
						外面部 明褐色(7.5W7/1)	外面部 ハラナデ、ハラケズリ	
						底成 良好	底面部 ハラケズリ	
採集 8	土師器	楕円形 底径 認高	10.8 — 3.8	完存 — —	白色砂粒、小石 —	内面 周灰(7.5W2/1)	内面 ハラケズリ、ミガキ	内外面黒色処理 外面部質付着
						外面部 周灰(7.5W6/1)	外面部 ハラケズリ、ミガキ	
						底成 良好	底面部 ハラケズリ	
採集 9	須恵器	切削痕 底径 認高	8.1 — 4.0	90%	白色砂粒、石英	内面 周灰(10W4/1)	内面 ロクロバケズリ	須物底か? 外面部質付着
						外面部 周灰(10W6/1)	外面部 ロクロバケズリ、ハラケズリ	
						底成 良好	底面部 ロクロバケズリ	
採集 10	陶器	甕 底径 認高	10.6 — —	90%	白色砂粒、石英	内面 周灰(10W4/1)	内面 ロクロバケズリ	外面部質付着
						外面部 周灰(10W6/1)	外面部 ロクロバケズリ	
						底成 良好	底面部 ロクロバケズリ	
採集 11	陶器	甕 底径 認高	— — —	—	白砂粒	内面 こぶし・凹(7.5W5/3)	内面 —	瓶口美濃產 外面部質付着
						底成 良好	底面部 —	
						内面 こぶし・凹(7.5W5/3)	内面 ロクロナデ	
出土 1	弥生土器	甕形土器 底径 認高	— — —	—	白砂粒	内面 ロクロナデ	内面 ロクロナデ	
						外面部 こぶし・凹(7.5W5/3)	外面部 ハケ	
						底成 良好	底面部 ハケ	
数委 1	須恵器	甕形土器 底径 認高	— — —	—	白砂粒	内面 こぶし・凹(10W5/3)	内面 ナゲ	
						外面部 こぶし・凹(10W6/3)	外面部 ナゲ	
						底成 良好	底面部 ナゲ	



第10図 採集遺物・出土遺物

第4表 錢貨観察表

No.	錢貨名	外縁外径 (mm)	外縁内径 (mm)	内郭外径 (mm)	内郭内径 (mm)	外縁厚 (mm)	内面厚 (mm)	重量(g)	備考
探集 12	真永通寶	24.8	20.4	7.4	5.9	0.2	0.1	2.96	新寛永
出土 2	文久永寶	26.9	21.6	8.8	6.9	0.2	0.1	3.87	

## 第3節 人骨（第5表・図版5）

人骨は、地権者による採集と市教育委員会の試掘で資料が得られた。市教育委員会の試掘で出土した上腕骨が接合する骨片を除くと、他は全て地権者の採集によるものである。元位置は保っていないと考えられ、堆積層位による時期の特定は不可能である。試掘では5層から出土した。

骨片からは、性別や年齢を特定することはできなかった。それぞれの部位はしっかりとしており、遺存状況は概ね良好といえる。指骨、上腕骨、桡骨、大腿骨、腓骨の骨片が出土している。

## 第4節 動物遺存体（第11図・第6～8表・図版5～6）

全て地権者によって採集された資料である。採集した際の層序が不明であるため時期の特定はできない。資料は、脊椎動物と貝類に分類できる。

脊椎動物は、種同定可能資料が5点である。哺乳類のイノシシまたはシカ、イヌと魚類のマグロ属である。

貝類は、サザエ(33点)が最も多く、次いでアワビ(6点)、そしてキサゴ(1点)である。洞内奥を覗き込んだ際にまだサザエが残されているのを確認した。他に細片があるが、個数に含めていない。いずれも被熱を受けた痕跡や加工痕、摩耗痕は認められない。サザエは全て有棘タイプの殻のみで、蓋はみられない。殻高を計測したところ、最大の個体で12.21cm、最小の個体で8.68cm、平均10.32cmであった。現行の千葉県漁業調整規則で、殻高7cm以下のものの採捕制限が規定されていることから採集資料は現生種より大きいといえる。アワビの殻長は、最大で24.35cm、最小で7.93cm、平均16.40cmであった。大きさが一定でないことから管理された漁場での採捕ではないと考えられる。アワビもサザエ同様に現生種より大きいといえる。

第5表 人骨観察表

No.	部位	備考
1	指骨	地権者採集
2	上腕骨(左)	地権者採集・教委試掘出土接合
3	桡骨(左)	地権者採集
4	大腿骨(右)	教委試掘出土
5	大腿骨(左)	地権者採集
6	膝骨(左)	地権者採集

第6表 脊椎動物観察表

No.	動物名	部位	備考
1	イノシシまたはシカの幼齢	頭骨	地権者採集
2	イヌ	頭骨	地権者採集
3	イヌ	肩甲骨(右)	地権者採集
4	イヌ	仙骨	地権者採集
5	マグロ属	椎骨	地権者採集

第7表 貝類(サザエ)殻高一覧表

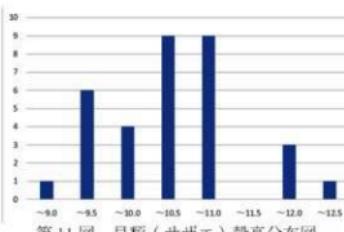
9.96	9.34	10.19	11.78	11.78	10.66
9.83	9.92	10.42	10.20	10.63	11.77
10.77	12.21	10.73	10.23	10.01	9.44
9.90	10.46	10.95	10.52	10.70	10.46
9.16	9.25	8.68	10.42	10.52	10.93
9.31	10.08	9.48			

単位(cm)

第8表 貝類(アワビ)殻長一覧表

15.63	15.03	24.35	12.94	7.93	22.3
-------	-------	-------	-------	------	------

単位(cm)



第11図 貝類(サザエ)殻高分布図

## 第3章 詳細分布調査の成果

忽戸魚見根洞窟遺跡周辺の現地踏査を行い、類例の確認と新発見の洞窟の踏査を実施した。また、既に調査歴のある洞窟の現況確認を行った。以下に報告する洞窟では、考古遺物は採集されていない。したがって、現時点では埋蔵文化財包蔵地とは認められないが、立地環境などから古代の人々に利用されていた可能性がある洞窟もあり、引き続き検討を要する。洞窟の形成要因は、伏姫籠穴・伏姫籠穴前洞穴を除き、海食と考えられる。(図版7・8)

### 第1節 千倉町域の洞窟

#### ① 忽戸洞窟 I

千倉町忽戸字臺1078-1付近／全長約50m／標高23.2m／北東向き開口

旧忽戸小学校裏山の丘陵端に開口する。昼間ほか(1993)の忽戸洞C-1洞に対応する。防空壕として再利用されていたため、天井部と壁面に拡張した痕跡がみられ、内部は人が立てる高さを有している。通称「へいとのぼら」と呼ばれているが、「へいとん」は乞食やホームレス、「ぼら」は洞を意味する房州弁(方言)である。この呼び方は、前述の健田遺跡群で発掘された日向薬師横穴墓も同様に呼ばれていたようで、報告書にも「地域住民の話によれば「へいと」と呼ばれた人々が、極く最近まで日向薬師が位置するテラスに、パラック的簡易住宅を建て生活していたという。(略)この「へいと」は、ほぼ「乞食(ほいと)」「陪堂(ほいとう)」に対応すると思われ、本横穴群には日向薬師を含めて、いわゆる歴史の「周辺部」に属したと考えられる人々の生活の痕跡の一部を良好に残している可能性がある」と記載があり、この洞窟もそういった「周辺部」に属する人々の生活拠点の一つとして再利用されていたと考えられる。忽戸小学校に通った人達はこの洞窟の存在を認知しており、かつて放課後に探検した覚えがあると語っている。

#### ② 忽戸洞窟 II

千倉町忽戸146／全長約20m(目測)／標高22.6m／北東向き開口

能蔵院境内の墓地背後の丘陵端に開口する。今回新発見の海食洞窟である。開口部には墓地が造成されており、本来の形状は不明であるが、墓地脇には側壁らしき岩盤が残存していることから墓地部分も以前は洞窟であったと考えられる。最奥部はドーム状に収束していく、その後小洞が続く。砂岩質で構成されており、天井部の落盤による大きな岩塊や側壁のズレが観察できるが、削平など明確な人為的改変が認められない。

#### ③ 平館地区洞窟

千倉町平館字永崎184付近／全長約10m(目測)／標高24.7m／北東向き開口

永崎堂の墓地背後の丘陵端に開口する。今回新発見の海食洞窟である。鉄柵で入口部分が塞がれており、洞内の立ち入りはできない。土砂や落葉によって開口部下半が埋没している。堂背後の丘陵一帯は、富士講信仰関連遺構が残されており、本洞窟も開口部上面に「富士山 御人穴」と彫られている。これを防るために開口部は幾分か平滑に整えられているが、内部には祠が安置されている以外、明確な人為的改変が認められない。

#### ④ 南朝夷洞窟

千倉町南朝夷字池ノ尻 1638 付近か／全長約 10 m／標高 18 m／北東向き開口

星間ほか (1993) の C-2 洞に対応する。草木繁茂により今回は現地確認できなかった。周辺は畠地の間に宅地が所在しているが、新たな開発行為は行われておらず、洞窟は遺存しているものと考えられる。

#### ⑤ 白間津地区洞窟

千倉町白間津儘 1715 付近／全長約 40 m／標高 19.7 m／北東向き開口

県道に面した海食崖に開口する。星間ほか (1993) の S-2・3 洞に対応し、そして民話「手長婆」の洞穴である。開口部崖面は崩落により垂直に立ち上がっており、草木も繁茂していることから洞内の立ち入りはできなかった。開口部崖面は、崩落により垂直に立ち上がっている。民話「手長婆」とは「千倉町白間津の氏神に近い山腹に、『手長婆の洞』と呼ばれる二つの洞穴があります。昔むかし、その洞穴に手の長い一人の婆が住んでいました。里人たちは、その婆を手長婆と読んでいましたが、婆はどこの生まれか、どんな性気なのか誰も知りませんでした。なぜかと言えば、婆の手がたいそう長くて氣味が悪い上に、顔が鬼婆のように怖いので、誰も恐れて付き合わなかったからです。そのため、婆はまったく一人ぼっちでした。話相手は一人もなく、朝夕暗い洞穴に住んでいました。その婆の唯一の慰みは磯物捕ることでした。捕るといつても浜へ出てではなく、洞穴に座ったまま、里越しに長い長い手を伸ばして磯物を捕るのです。大川と白間津の境辺の浜は、いつも婆が手を伸ばす所でした。手長婆は随分長生きをしたようですが、しかし、いつ死んだのか、又どうして死んだのか、少しも分かってはいません。今、その婆は住んでいた洞穴を訪ねて、その内部を掘りますと、鮑や榮螺などの貝殻が出てくる」(生稻 2016) というものである。民話の婆は、古代の洞窟を利用していた人々か、その後再利用した人々を指しているのか不明だが、この民話には洞窟と洞窟を利用した人々を忌避するような思想が垣間見える。民話には手長婆が「大川と白間津の境辺」に手を伸ばしたとあるが、現在の開口向きとは一致しない。前部が崩落で既に失われているからであろう。

### 第2節 市内の洞窟

#### ① 大房岬の海食崖付近洞窟群（富浦地区）

富浦町多田良／全長約 7 ~ 30 m／標高 2 ~ 20 m／南東・南西向き開口

東京湾に面した岬の海食崖に開口する。千葉県教育委員会 (2003) に掲載されている洞穴群である。大房弁財天洞窟は、見学路造成に伴う盛土によって下半が埋没している。県教育委員会の現地踏査では最奥部が確認できおらず、今回も確認はできなかった。大房岬先端部分の海食崖下部の標高 2 ~ 3 m に開口している海食洞は、岩陰という表現が合う奥行きが短く、幅が広い形状である。いずれも海砂が厚く堆積しており、洞内の観察はできない。大房不動滝脇の岩窟は草木繁茂により立ち入りできなかったが、ノッチが発達しているため海食洞窟を利用したやぐらとも考えられる。

#### ② 小浦の弁天様（富山地区）

小浦 481 / 全長約 5 m 以上 (目測) / 標高 12.9 m / 北西向き開口

東京湾に面した丘陵端に開口する。房総半島各地に源頼朝伝説が残されているが、この神社にも頼朝が立ち寄ったと伝えられ、市史跡に指定されている。過去に洞窟として報告されたことはないが、

ノッチが散見されることから海食洞窟の可能性がある。洞窟内部に神社が建立されており、神社の屋根形状に沿って削平されている。水没のため確認できないが、洞窟は数百m続いているという伝承が残されている。

#### ③ 伏姫籠穴・伏姫籠穴前洞穴（富山地区）

合戸／全長約 6.3 m（伏姫籠穴前洞穴）／標高 82.9 m／南西・南東向き開口

富山を頂上とする丘陵南斜面で登山道の途上に開口している。千葉県教育委員会（2003）に掲載されている洞窟である。この2つの洞窟は、風食による浸食を受けたことが形成要因とされている。伏姫籠穴は、江戸時代に曲亭馬琴が著した『南總里見八犬伝』にちなんだ観光スポットとして整備されている。県教育委員会の現地踏査時には開口部に鉄扉が設置され、卒塔婆が立っていたようだが、現在はどちらも無い。鉄扉が無くなつたため内部への立ち入りが可能だが、毀損を受けた様子はない。伏姫籠穴前洞窟は、洞内に五輪塔や宝篋印塔の一部が安置されている。県教育委員会現地踏査時の写真と現況を比較すると、草木が繁茂し、石塊や土砂が崩落が進み開口部下部に厚く堆積してしまっている。

#### ④ 岩井高崎洞窟（富山地区）

高崎 1508-2 ほか／全長約 6～15 m 以上／標高 18 m／北東向き開口

高崎山の丘陵斜面部に開口する。千葉県教育委員会（2003）に掲載されている洞窟群である。高崎山駐車場をはさんで西側が A 洞穴、東側が B 洞穴である。A 洞穴は草木繁茂により今回は現地確認できなかつた。線路沿いという立地から新たな開発行為が発生する可能性は低く、洞窟は遺存している可能性が高い。B 洞穴もやはり草木繁茂により全景は確認できなかつたが、崩落は進んでいないようで、奥壁が遺存していた。

#### ⑤ 白浜の鍾乳洞（白浜地区）

白浜町白浜 14039-1／全長約 5 m／標高 17.3 m／南西向き開口

安房グリーンライン東側の丘陵端部、涼源寺の滝の脇に開口する。県指定天然記念物に指定されている鍾乳洞である。鍾乳洞内は、鍾乳石の保護のため立ち入りを禁止している。鍾乳石はカルシウム分を含んだ地下水が洞内に染み出でて産出される。地元の方（80歳代）にご案内いただいたが、小学生の頃の遊び場だったこと、その頃に団体が来て鍾乳石を採取してしまったこと、洞窟開口部の崩落が進んでおり以前より全長が短くなっていることなどをご教示いただいた。鍾乳石の形状から地下水を飲むと母乳の出が良くなるという伝承があり、洞内には地下水を受ける石筍があり、乳神様と呼ばれる祠が安置されている。信仰から洞内は削平などの明確な人為的な改変は受けていない。

#### ⑥ 白浜町根本一帯（白浜地区）

白浜町根本／全長約 4～250 m／標高 6～7 m／南向き開口

星間ほか（1993）の M-8～10 洞に対応する。私有地のため今回は現地確認できなかつた。閉鎖した白浜フラワーパーク内では、現在は建物などが解体されているが、新たな開発行為は行われておらず、洞窟は遺存しているものと考えられる。

## 第4章 総 括

### 第1節 忽戸魚見根洞窟遺跡の調査成果

忽戸魚見根洞窟遺跡は、太平洋に面した海食崖に開口した海食洞窟に営まれた遺跡である。詳細分布調査を実施し、洞内の簡易測量と試掘を実施した。海食洞窟は、三浦層群中の千倉層で構成され、疊岩、砂岩及びシルト層の互層からなっている。現況での洞窟の規模は、奥行き約12m、高さ約0.4～1.0m、開口部の幅3.5m、洞内の幅1.2～1.54mを測る。最奥部は天井部の落盤があったが、開口部などにはみられない。丘陵は削平され、既に洞窟前庭部は失われているが、洞内に人為的改変は認められない。洞内中央部に試掘トレンチを設定し、堆積土層を掘削した。上層は絶え間ない風成作用により擾乱を受けた土層、その下層は漂砂や風成作用により堆積した土層という層序で、明確な遺構は検出されなかった。上層からは弥生土器と古銭が混在して出土し、下層からは人骨などの微細遺物が出土した。

試掘で出土した遺物に加えて、地権者が採集した遺物を検討すると弥生時代～近世までの年代が与えられる。本遺跡の主体となるのは、土師器の年代から6世紀中葉から後葉と想定される。この土師器は、安房地域の他遺跡に比べて焼成が良好で、赤彩が施されているのが特徴で、複数点出土している。これらに加えて、弥生土器、奈良・平安時代土師器、中・近世陶器が採集されている。このことから本洞窟は、弥生時代に利用が開始され、古墳時代後期にそのピークを迎える、7世紀代まで利用が続けられ、一旦役割を終えた。そして再び中・近世に家を持たざる人々が拠点として利用したと考えられる。本遺跡は標高が高く、地震により隆起した時期が早いと考えられることから今後の調査によっては、現在の成果より時代が遡る縄文時代の遺構・遺物が検出される可能性がある。

人骨は、全身骨格ではなく腕や脚の部位のみで性別や年齢は特定できない。貝類の堆積によるカルシウム分の影響で遺存状況は概ね良好といえる。採集資料の一部と出土資料の骨片が接合することから本来の堆積状況は不明であり、洞窟利用時もしくはその後の再利用時に埋葬あるいは遺棄されたのかその性格は不明である。古墳時代の洞窟が墓域として利用されていたことは既に指摘されており、忽戸魚見根洞窟遺跡の利用ピークが古墳時代後期とすれば、墓域としての利用が想定され、さらに人骨や埋葬に係る遺構・遺物が検出される可能性がある。

動物遺存体は、全て地権者によって採集され、脊椎動物と貝類に分類できる。層序が不明で時期の特定はできない。脊椎動物は、イヌなどの哺乳類や魚類だが、埋葬あるいは廃棄されたのか、今回の調査では判断できない。貝類は、サザエが主体で、次いでアワビ、キサゴと続く。いずれも貝に直接被歯の痕跡や加工痕は認められない。サザエとアワビは現生種より大きく、他の洞窟遺跡で出土している資料と同様の傾向である。このため、洞窟が利用されていた時期に採集されたものと仮定したい。サザエは蓋が伴っていないが、洞窟外で茹でるなどの加工されたのか、あるいは人為的集積の可能性が検討される。アワビは、健田遺跡群発掘の契機となった平城宮木簡にみられるように古代の安房の特産品で、白浜町沢辺遺跡ではアワビオコシが出土している。古代には乾燥した熨斗アワビとして加工され、都に運搬されたとされており、本遺跡出土資料も特産品として加工されたか、もしくは自家消費のための食料資源という可能性が検討される。いずれにしても現在の海女漁の先駆け的な人々による採捕であろう。

## 第2節 忽戸魚見根洞窟遺跡の重要性

本遺跡は、今回の調査によって人為的に利用された洞窟遺跡であることが明らかになった。洞窟遺跡の数は、平成15(2003)年の千葉県教育委員会の詳細分布調査で、51遺跡（うち消滅・所在不明とされているのは8遺跡）とされている。県内の周知の埋蔵文化財包蔵地の件数は、令和3(2021)年度調査で27,562件であり、そもそも稀少性ある遺跡種別であることはいうまでもない。その分布は銚子市海鹿島岩陰、外房地域（現勝浦市～鴨川市）、東京湾内房地域（現富津市竹岡～鋸南町勝山）、県南端部（南房総市富山～館山市布良）に分かれ、それぞれ標高や開口向きの傾向が異なる。そういった從来までの調査歴で所在が確認されていなかった、県南端部外房地域に立地することが本遺跡の特徴の一つである。

そして洞窟遺跡は、館山市大寺山洞穴遺跡の舟葬例などから海人（漁撈民）の首長の墓と考えられている。少なくとも古墳時代に利用されたと考えられる本遺跡からは、アワビなどの貝類が採集されており、この遺跡の存在は、安房地域の古墳時代の墓制を考える上で重要な遺跡となる。その一方で、周辺の丘陵端には多くの横穴墓が残されており、被葬者の差異を検討できる遺跡ともなっている。加えて、踏査によって周辺の海食洞窟の存在が確認できた。これらの人為的利用は確認できていないが、今後それらの利用状況を検討することで、本遺跡との関連や海人の漁業活動などの様相を解明する一端となり、より鮮明に本遺跡の性格が明らかとなるだろう。

## 第3節 忽戸魚見根洞窟遺跡の保存と活用について

本遺跡の重要性は上記まで述べてきたとおりである。開口している洞窟遺跡は崩落や改変を受けているものが多く、本遺跡で完形資料を含む遺物が採集されたことは、良好な保存状態で今日まで保存されてきたことを表しており、そのままの状態で次世代にのこすことが望ましい。

遺跡に隣接している旧忽戸小学校跡地では、市の事業の一環で千倉地区社会体育施設・コミュニティ施設等整備構想が検討されている。この施設を拠点とし、本遺跡をはじめとする市内文化財の展示・公開などや屏風岩などの豊かな自然資源を含めた散策ルートの設定を行うことで、地域の歴史や文化に触れてもらう機会を創出することとしたい。また、本遺跡の特徴の一つとしてアワビやサザエの貝殻が採集されたことであるが、現代においても千葉県外房地域では海女（海士）漁が行われ、貝類が漁業採捕されている。海女漁が盛んな白浜地域では毎年に南房総白浜海女祭りが開催され、多数の観光客が市を訪れる。本遺跡を通して漁業の歴史、民俗、そして産業を情報発信し、観光につなげることができる。

上記の事項などを組み合わせた本遺跡の活用事業が図られ、積極的な情報発信が望まれる。

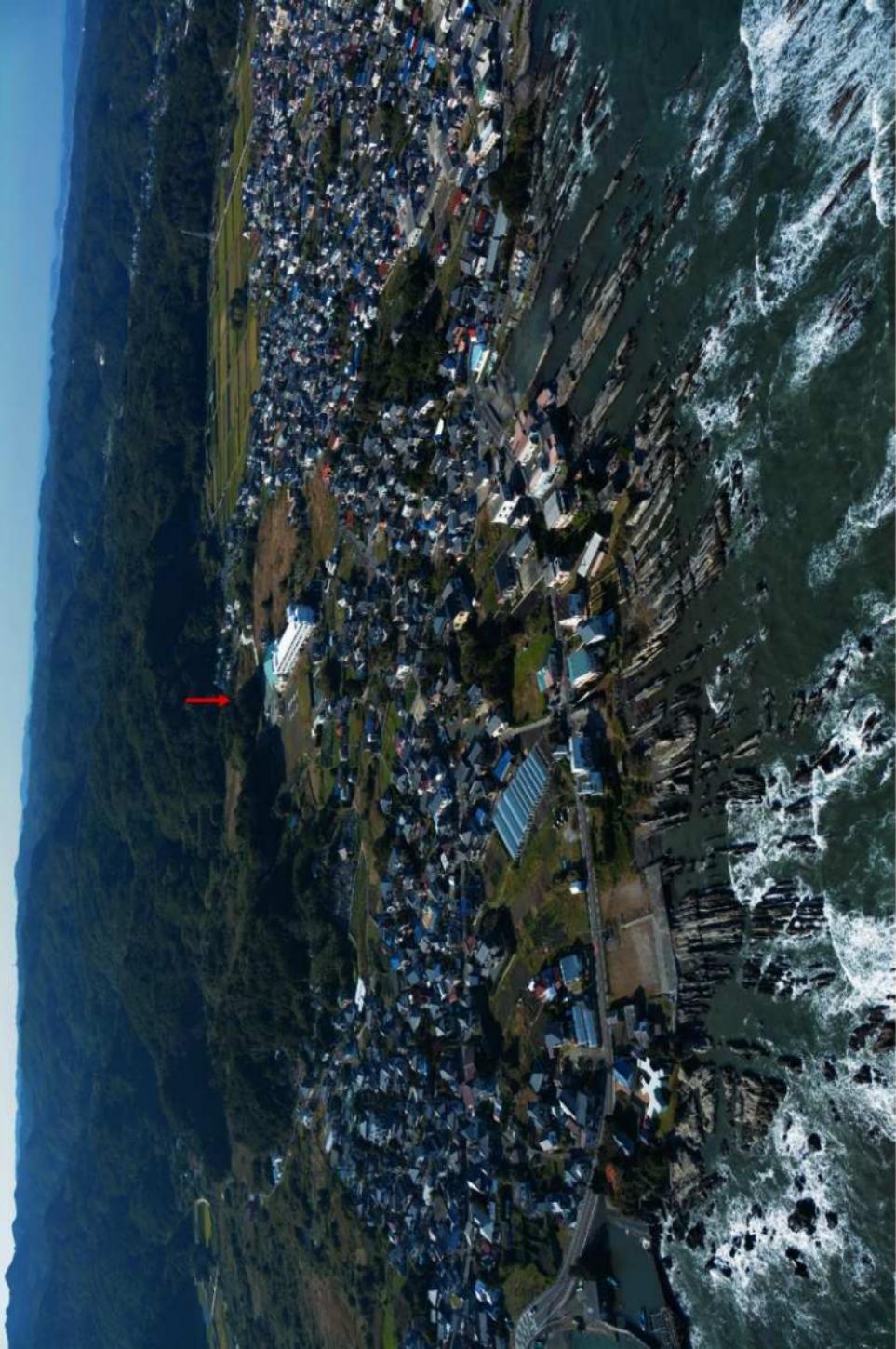
## 第4節 今後の課題

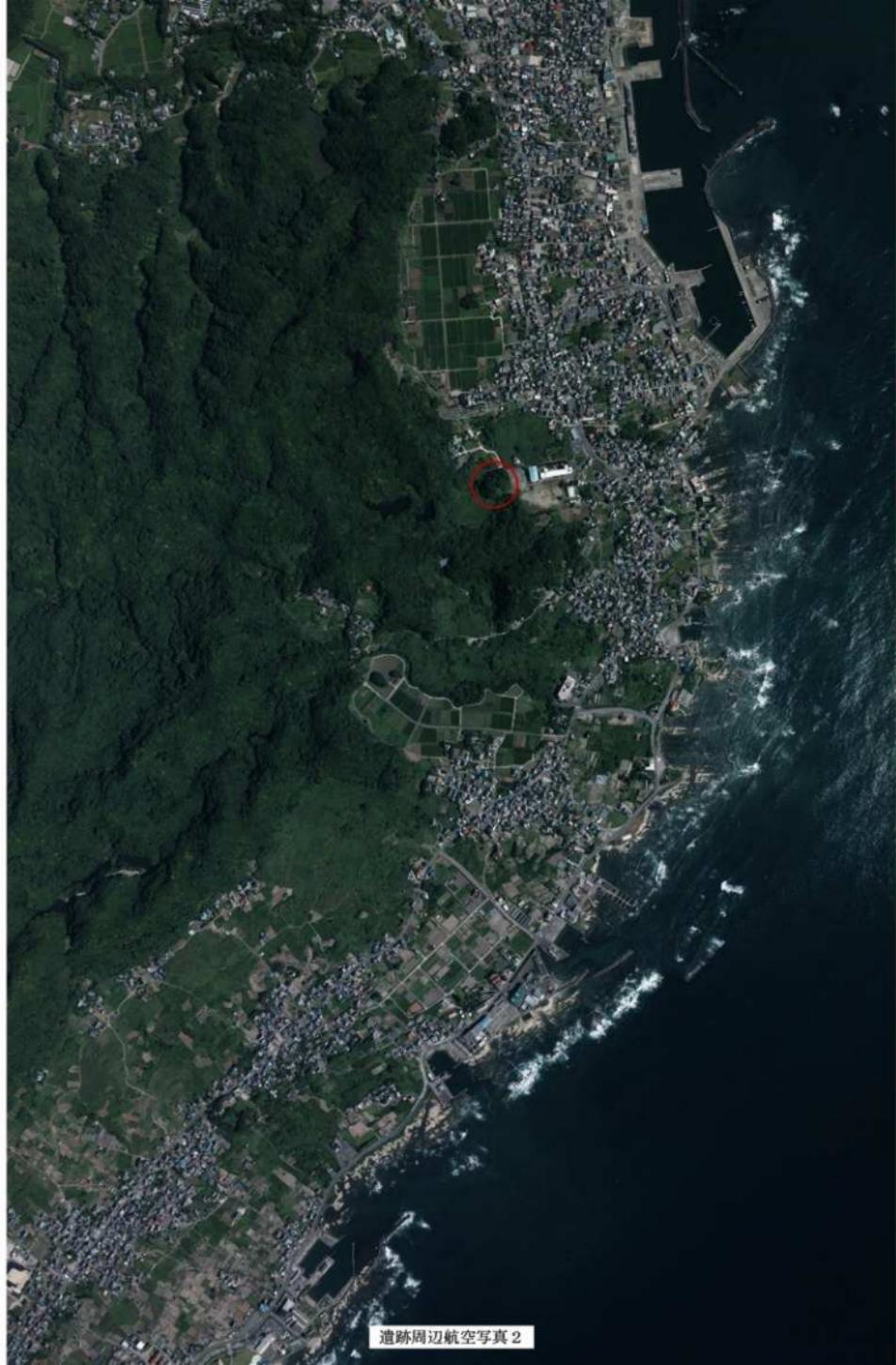
今回は遺跡の基礎資料を得ることが目的だったが、期間や費用の面が不十分な調査となった。今後調査の機会に恵まれた際は、今回の成果を順次更新・訂正するものとしたい。採集・検出資料の自然科学分析は実施できず、人骨や動物遺存体の年代は明らかにできなかった。いずれ関連学問分野からの検討の必要もあるだろう。

## 参考文献

- 相川一男 2001『南房総 千倉町文学・歴史散歩』
- 天野努 2001『古代房総の漁撈民とその生産活動』『千葉県立安房博物館研究紀要』VOL. 8
- 新井高代 1995『忽戸のいわれと薬師堂』ふるさとくら』12 千倉町郷土史研究会
- 生稻謙爾 2016『南房総市の昔話 第一集』
- 小沢洋 2008『房総古墳文化の研究』
- 海上保安庁水路部 1951『本州南東岸水路誌』
- 川上俊介・宍倉正展 2006『館山地域の地質』独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター
- 清武雄二 2021『アワビと古代国家ー「延喜式」にみる食材の生産と管理』
- 公益財団法人千葉県教育振興財団 2013『研究紀要』28
- 財団法人総南文化財センター 2003『千葉県安房郡白浜町青木松山遺跡・沢辺遺跡発掘調査報告書』(財)総南文化財センター調査報告 第4集
- 白井久美子 1992『海人の首長』『房総考古学ライブラリー 6 古墳時代(2)』
- 健田遺跡発掘調査団編 1975『千葉県安房郡千倉町健田遺跡発掘調査報告書 第1次調査報告』千葉県教育委員会
- 健田遺跡発掘調査団編 1978『健田遺跡 第2次調査報告』朝夷地区教育委員会
- 健田遺跡発掘調査団編 1979『健田遺跡 第3次調査』朝夷地区教育委員会
- 健田遺跡発掘調査団編 1980『千葉県安房郡千倉町健田遺跡発掘調査概報 第4次調査』朝夷地区教育委員会
- 館山市立博物館 2013『幕末の東京湾警備』
- 千倉町 1985『千倉町史』
- 千倉町役場 1922『千倉町志』
- 千葉大学文学部考古学研究室 1994『大寺山洞穴 第1次発掘調査概報』
- 千葉県 2016『南房総地域半島振興計画』
- 千葉県安房郡教育会 1926『千葉県安房郡志』
- 千葉県企画部企画課 1971『駒山』『房総半島総合開発地域 土地分類基本調査』
- 千葉県企画部広報県民課 1988『千葉県史料近世篇 伊能忠敬測量日記1』千葉県
- 千葉県史料研究財団編 2003『千葉県の歴史 資料編考古2 弥生・古墳時代』県史シリーズ10 千葉県
- 千葉県史料研究財団編 1998『千葉県の歴史 資料編考古3 長良・平安時代』県史シリーズ11 千葉県
- 千葉県教育委員会 2000『千葉県埋蔵文化財分布地図 4 カ津・夷隅・安房地区』
- 千葉県教育委員会 2003『千葉県所在洞穴遺跡・横穴墓詳細分布調査報告書』
- 千葉県教育庁教育振興部文化財課 2004『ふさの国文化財総覧 第1巻 安房・夷隅・長生』
- 東洋大学未来考古学研究会編 1982『千倉町埋蔵文化財調査報告書5～6 健田遺跡開発』朝夷地区教育委員会
- 東洋大学未来考古学研究会編 1983『千倉町埋蔵文化財調査報告書7 健田遺跡開発 第7次調査』朝夷地区教育委員会
- 東洋大学未来考古学研究会編 1984『千倉町埋蔵文化財調査報告書8 健田遺跡開発 第8次調査』朝夷地区教育委員会
- 東洋大学未来考古学研究会編 1986『千倉町埋蔵文化財調査報告書9 健田遺跡開発 第9次調査』朝夷地区教育委員会
- 東洋大学未来考古学研究会編 1987『千倉町埋蔵文化財調査報告書10 健田遺跡開発 第10次調査』朝夷地区教育委員会
- 東洋大学未来考古学研究会編 1990『千倉町埋蔵文化財調査報告書11 健田遺跡開発 第11・12・13次調査』朝夷地区教育委員会
- 長瀬端己 2000「地名を読む(千倉とその周辺)」『研究紀要』25 東京学芸大学付属高等学校大泉校舎
- 中村勉 1997「アワビの考古学—三浦半島の海蝕洞穴から出土するアワビについてー」『横須賀考古学会研究紀要』第1号
- 中村浩 2001『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』
- 星間明ほか 1993『房総半島南部にみられる海蝕洞について』『埼玉大学紀要 自然科学篇』第29巻
- 藤井幸司 2020「弥生時代以降の洞窟遺跡」『季刊考古学』151 洞窟遺跡の過去・現在・未来】
- 松本勝 1996『宇田城跡』『千葉県所在中近世城館跡群細分布調査報告書II 旧上締・安房国地域ー』千葉県教育委員会
- 南房総国立研究開発法人産業技術総合研究所、『元禄型開闢地農の再来間隔、最短2000年ではなく500年』、産総研、2017-05-11  
[https://www.aist.go.jp/aist\\_j/press\\_release/pr2017/pr20170511/pr20170511.html](https://www.aist.go.jp/aist_j/press_release/pr2017/pr20170511/pr20170511.html)、(参照 2023-09-13)
- 南房総市 2021『南房総市国土強化化地域計画』
- 四柳隆ほか 2020『房総半島・三浦半島』『季刊考古学』151 洞窟遺跡の過去・現在・未来】

写 真 図 版





遺跡周辺航空写真 2



忽戸魚見根洞窟遺跡遠景



忽戸魚見根洞窟遺跡からの眺望



忽戸魚見根洞窟遺跡現地確認時の洞内状況



遺物出土状況



試掘トレンチ全景



試掘トレンチセクション



古銭出土状況



試掘トレンチ遺物・人骨出土状況

現地踏査・試掘実施状況

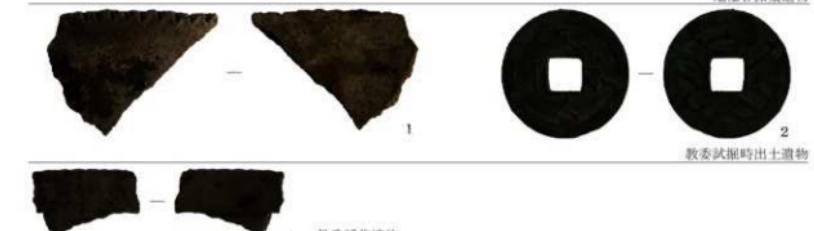
図版 4



地樁者採集遺物



教委試掘時出土遺物



1 教委採集遺物

採集遺物・出土遺物

图版5



人骨・脊椎動物遺存体

圖版 6



採集貝類



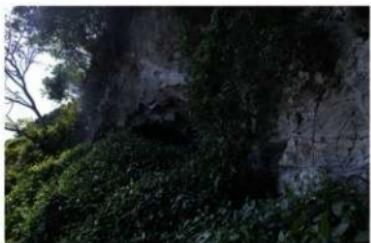
忽戸洞窟 I (へいとのぼら)



忽戸洞窟 II (能藏院境内)



平舎洞窟 I (永崎堂境内)



白間津地区洞窟 I (手長婆の洞穴)



大房弁財天洞穴

市内の洞窟 1

図版 8



大房B洞穴とその周辺域



大房岬先端の岩陰状地形



大房不動滝岩窟



小浦の弁天様



伏姫籠穴



伏姫籠穴前洞穴



岩井高崎B洞穴奥壁



白浜の鍾乳洞

市内の洞窟 2

報告書抄録



市のイメージキャラクター「みなたん」は、海女さんをモチーフとし、南房総市の海の幸を頭にのせ、左手には特産品の房州びわを持っています。アワビやサザエをのせており、現代においてもこれらは市の特産物である。

---

---

## 南房総市忽戸魚見根洞窟遺跡 —詳細分布調査に伴う報告書—

発行年 令和5(2023)年11月30日  
発 行 南房総市教育委員会

---

---